

坂口安吾「桜の森の満開の下」

村上晴日

はじめに

坂口安吾の「桜の森の満開の下」は、一九四七年六月一日発行の『肉体』第一巻第一号の「創作」欄に発表された。先行論では桜の森の正体ⁱや女の「首遊び」ⁱⁱ、彼女が「鬼」となった理由ⁱⁱⁱ、それから男と女の性質や関係性^{iv}、更に「桜の森の満開の下の秘密」とされる「孤独」^vにも着目されてきた。本論においてもそれらに焦点を当ててはいるものの、論の展開や結びが先行論とは異なってくる。

本論では、第一章で桜の森の満開と女に共通する「形成と分解の魔術」に焦点を当て、それが男にどう作用したのか、ということについて論じる。第二章では男と女の性質・人物像に焦点を当て、一章で拾えなかった細かな部分について論を進めていく。更に第三章では、安吾の戦争体験に触れ、その経験が本作品にどのように影響しているのかを考える。

第一章

第一節 桜の森の満開と女の共通性

【「形成」と「分解」から見る共通性】

次の文章は、女の美が飾り物を付け足すことによって完成されていくのを目の当たりにした男が驚嘆をもらす場面である。(以下、安吾の文章からの引用は『坂口安吾全集』一九九八年五月～二〇一二年二月 筑摩書房) に拠り、傍点・ルビは省略、傍線は論者が付したものである)

かくして一つの美が成りたち、その美に彼が満たされてゐる、それは疑る余地がない、個としては意味をもたない不完全かつ不可解な断片が集まることによつて一つの物を完成する、その物を分解すれば無意味なる断片に帰する、それを彼は彼らしく一つの妙なる魔術

として納得させられたのでした。

桜の森も、個としては意味をもたない不完全な断片（＝花びら）が集まることによって一つの物を完成し（＝桜の森）、その物（＝桜の森）を分解すれば、無意味なる断片（＝花びら）に帰する。これは、男が「魔術」として理解したものと同じ仕組みである。このことから、「魔術」は女と桜の森に共通するものであると言える。

また、この「魔術」だけではなく、女の「首遊び」からも、桜の森との共通点が見出せる。桜の花の森が「形成」される要件としては、「桜の木の集合」、「桜の蕾の集合」が挙げられる。そこから蕾が成熟し、開花すると、桜の花の森となる。その後、花は花びらとなって、バラバラの状態で散り、桜の花の森は完全に消える。これは、女の「首遊び」にも言えることである。女は、人間の首を集めて「首の家族」や「物語」を「形成」している。物語を「形成」するためには、多くの登場人物が必要となる。女は、「個々の首」を集めることによって「首の森（＝首の家族や物語）」を「形成」し、最終的には首が崩れると大喜びしたり、自ら首を針でつついて穴を開け、小刀で切ったり、えぐったりしてバラバラに「分解」した。このことから、桜の森の満開の「形成」と「分解」は、女の「首遊び」にも共通することだと

言える。

【男の視点から見る共通性】

女に言われるままに女房たちを斬り殺した後の場面で、男は「不安」を感じている。そして「不安」を感じながら男は、それが桜の森の満開の下を通るときに「似てゐる」ことに気が付く。男は、桜の森の満開の下を通る時に、「花びらがぼそく散るやうに魂が散つていのちがだんく衰へて行くやうに」感じている。つまり、女に対して感じた「不安」というのも、「魂が散つていのちがだんく衰へて行くやう」な「不安」であると言える。

また、男がひそかに桜の森に行き、その満開の下に足を踏み入れようとしたときのことであるが、本文には、「一足ふみこむとき、彼は女の苦笑を思ひだしました。それは今までに覚えのない鋭さで頭を斬りました。それだけでも彼は混乱しておました。」とある。桜の森の満開の下に足を踏み入れる時に女の苦笑を思い出したこと、通常であれば、彼が混乱し、恐怖を感じるのは桜の森の満開の下に足を踏み入れた後であるはずなのに、女の苦笑を思い出したことよって桜の森の満開の下に足を踏み入れる前に既に混乱してしまったことから、やはり、男にとって桜の森の満開と女は共通性を持ったものだと言える。

ここまで、「形成」と「分解」、「男の視点」から桜の森の満開と女の共通性について述べてきたが、それではこの共通性は主人公の男にどのように作用しているのだろうか。ここで重要なのが、男は心を女に支配されている、ということである。男は、女と出会ってから首を集めるところまで、すべて女の言いなりになっている。また、「あの女が俺なんだらうか?」、「女を殺すと、俺を殺してしまふのだらうか。俺は何を考へてゐるのだらう?」と自問しており、自分と女を同一視している。この二点から、男の心は完全に女に支配されていると言える。また、この支配は桜の森の満開の下にも言えることである。なぜなら、桜の森の満開の下を通るといふことは、「桜の花々の支配下に入る」ということであるからだ。

この桜の森の満開と女には、初めに述べた「形成」と「分解」という「魔術」がある。この「魔術」は、桜の森の満開と女の支配下にある者にも作用すると言えないだろうか。男は「人間」という一つの個体であり、それは既に「形成」されたものである。故に、桜の森の「形成」の期間、つまり、「花の咲かない頃」は、その支配下を通っても、「形成の魔術」は男やその他の人間たちに作用することはない。しかし、「分解の魔術」の方はどうだろうか。桜の花は、散るのが早いため、満開の中で既に花が散り始めている。その

「分解」の進む桜の森の満開の支配下に入ると、「形成」された人間たちに「分解の魔術」が作用することになる。先ほども述べたように、本文には、桜の森の満開の下を通る時、「花びらがほそく散るやうに魂が散つていのちがだんく衰へて行くやうに思はれます。」と表現されている。花びらが散るやうに魂が散つていく、というのは、自分が無意味なる断片に帰するような感覚に陥るということである。つまり、桜の森の「分解」が進むその下では、人間の魂の「分解」が進み、自分自身が溶けて消えてしまうような感覚を抱くということである。これと同じことが、女の支配下に入った時にも言える。男が、キリのない女の欲望を止めるためには、「自分が女から逃げる」ということではなく、「女を殺す」ということしか思いつかなかったことと、「女を殺すと、俺を殺してしまふのだらうか。」と、「女」を「自分」と考えていることから、男の魂が男自体から離れ、女に引き寄せられていることがわかる。先ほども述べたやうに、男は、「人間」という一つの「個体」を「形成」している。故に、女の支配下に入っても、「魔術」の「形成」の部分は作用しない。作用するのは、「分解の魔術」である。女の支配下にある男は、魂が彼自体から離れ、女の魂に引き込まれつつあるのだ。

第二節 女の支配下にある男の抵抗

女の支配下であり、女の魂の方に引き寄せられている男であるが、桜の森の満開の下に女を連れて行くことだけは、最後の場面を除いて頑なに拒否している。

今年のひとつ、あの花ざかりの林のまんなかで、ジツと動かずに、いや、思ひきつて地べたへ坐つてやらう、と彼は考へました。そのとき、この女もつれて行かうか、彼はふと考へて、女の顔をチラと見ると、胸さわぎがして慌て、目をそらしました。自分の肚が女に知れては大変だといふ気持が、なぜだか胸に焼け残りました。

「私も花の下へ連れて行つておくれ」

「それは、だめだ」

男はキツパリ言ひました。

「一人でなくちや、だめなんだ」

桜の森の満開の下に座ってみようとすること、それは「魂の分解」に抵抗することに当たる。そして、「魂の分解」に抵抗する、ということとは、それと同じ「魔力」を持つ女

にも逆らう、ということである。これを無意識のうちに感じた男は、女に自分の肚が知られては大変だ、と思い、桜の森の満開の下に一人で行き、座ることを決めたのである。また、このことからわかるように、桜の森の満開の下と女の支配下では、自分の魂が「分解」されることを、男は無意識のうちに悟っていたのではないだろうか。自分の魂を「分解」する作用のある桜の森の満開の下に、それと同じ作用を持つ女を連れて行ってしまえば、二つの「分解」の作用が働き、自分自身が完全にバラバラになって消え、取り返しのつかないことになってしまうことを、男は無意識に感じていたために、女を連れて桜の森の満開の下に行くことを拒否したのではないかと思う。

第三節 鬼となった女

自分を支配している女への抵抗とイコールに思われる、「桜の森の満開の下に座ること」が女にばれてしまうこと、魂の「分解」の作用が二重に働いて取り返しのつかないことになってしまうこと、この二つの理由から、桜の森の満開の下に女を連れて行くのを拒んでいた男であったが、遂に男は、女を背負って桜の森の満開の下に足を踏み入れてしまう。

「お前と首と、どつちか一つを選ばなければならぬなら、私は首をあきらめるよ」と女に言われ、女と一緒に山へ帰ることになった男は、「夢ではないか」、「あまり嬉しすぎて信じられない」という幸福な状態であった。この日の男はあまりに幸せで、今までの懸念がすべて何処かへ行ってしまったのであろう。そして、何の恐れもなく、女を背負って桜の森の満開の下に足を踏み入れた男は、彼が無意識のうちに感じていた通り、「取り返しつかない」ことになってしまった。男の魂を「分解」する作用を持った女を背負って、それと同じ作用を持った桜の森の満開の下に足を踏み入れたときに、男はパニック状態に陥ったのである。満開の桜の下で、魂が散り、自分自身が無意味な断片に帰するような、自分自身が溶けてなくなるような感覚に陥りながら、自分の背中には、自分の魂を自分から引き離そうとする女がいる。「分解」の作用が二重に働くその恐るべき状況の中で、背中にしがみついているのは、男にとって恐ろしい「鬼」以外の何者でもなかったのである。男にとって「鬼」となった女を、男は絞め殺してしまつた。

第四節 消えた男と女

男は、初めて桜の森の満開の下に座っていた。魂が無意味なる断片に帰する感覚に恐れることなく座っていることができる理由を、本文では、「彼はもう帰るところがないのですから。」としているが、これは、女が死んでしまつたことから、彼の心が帰る場所を失つてしまつた、ということであると考へる。また、本文には、「桜の森の満開の下の秘密は誰にも今も分りません。あるひは『孤独』といふものであつたかも知れません。」と書かれているが、この「孤独」とは、「抛り所を失う」という意味であるように思へる。男は、女という抛り所を、桜の森の満開の下で失つたのである。

桜の森の満開の下で、魂が「分解」される恐怖が二重に襲ひ掛かり、自ら女を絞め殺してしまつた男は、女という自分の魂の「帰る場所」を失つてしまつた。男は、女の肉体が消え、花びらになつた光景を見たが、それは男の魂が「分解」され尽くす直前に捉えた幻である。「孤独」になつた男は、桜の森の満開の下の虚空に吸収され、心を失つてしまつたのだと考へられる。本文の、「花びらを掻き分けようとした彼の手も彼の身体も延した時にはもはや消えてゐました。あとに花びらと、冷めたい虚空がはりつめてゐ

るばかりでした。」という部分は、この「桜の森の満開の下」で語り手が最初に述べている、子供の幻を描いて狂い死にして花びらに埋まつてしまつた母親を連想させるため、男もこの母親と同様に、桜の森の満開の下で、女が花びらとなつて消えてしまふ幻を描いて、そのまま狂い死にしてしまつたのだろう。

第二章

第一節 女の支配下から抜け出せない男

「首遊び」の次の場面では、女の首に対する欲望のキリのなさ、そしてそれについて考えることに苦しみを感じる男の様子が描かれている。苦しむ男は女の命令に反発してみても結局言いくるめられ、また想念の苦しみの世界に入つてしまふ。その挙句、男は「女のある家」へ帰る勇氣を失い、数日の間山中を彷徨うことになつた。そんな苦しみの中にいた男は、ある朝目が覚めると、一本の桜の木の下で横になつていた。

ある朝、目がさめると、彼は桜の花の下にねてゐま

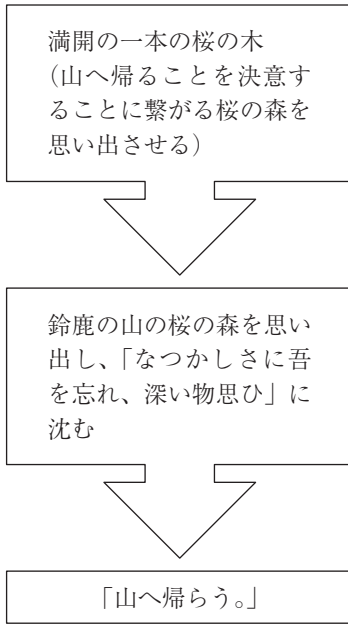
した。その桜の木は一本でした。桜の木は満開でした。彼は驚いて飛び起きましたが、それは逃げだすためではありません。なぜなら、たつた一本の桜の木でしたから。彼は鈴鹿の山の桜の森のことを突然思ひだしてゐたのです。あの山の桜の森も花盛りにちがひありません。彼はなつかしさに吾を忘れ、深い物思ひに沈みました。

この部分からわかるのは、「一本の桜の木」の下では、気が変になることも、「花びらがぼそく散るやうに魂が散つていのちがだんく衰へて行くやう」な気もしないといふことである。つまり、「一本の桜の木」は、桜の森が持つような「分解の魔術」を持たないのである。

第一章の「桜の森の満開と女の共通性」で、桜の花の森が「形成」される要件として、「桜の木の集合」と「桜の蕾の集合」を挙げた。つまり、「一本の桜の木」は桜の花の森を「形成」する材料の一つでしかなく、「森」ではない。そのため「魔術」は持ち得ないのである。

では、この「一本の桜の木」は作中においてどのような役割を果たしているのだろうか。男はこの「一本の桜の木」の下に寝ており、この木が満開であることに気づき、驚いて飛び起きた。しかしそれは逃げだすためではなく、「鈴

鹿の山の桜の森のことを突然思ひだし」たためである。この桜の森のことを思い出した男は山へ帰ることを決意する。彼は、「山へ帰るのだ。なぜこの単純なことを忘れてゐたのだらう？」と考え、このことよって「悪夢のさめた思ひ」、「救はれた思ひ」をしている。つまり、この「一本の桜の木」は、「山へ帰る」という「単純なこと」すら忘れる程女に囚われていた男に元の居場所を思い出させるきっかけとなる役割を担っているのである。



ただここで注意したいのが、「一本の桜の木」を見たときに男が思い出したのが「鈴鹿の山の桜の森」であったということがある。男が山へ帰るのを決意したのはこの桜の森のことを思い出し、それをなつかしむ気持ちで湧きあがったことによる。つまり、「一本の桜の木」は男が山へ帰ると決意する最初のきっかけとなったものではあるものの、直接的な要因ではない。

男が「山へ帰らう。山へ帰るのだ。なぜこの単純なことを忘れてゐたのだらう？」と考え、「悪夢のさめた思ひ」、「救はれた思ひ」をしていることから一見、女の支配下から抜け出したように思えるものの、その帰る決断を促したのは、女と同じ「魔力」を持つ「鈴鹿の山の桜の森」の存在なのである。このことは、結局男は女に心を奪われており、その支配からは逃げ出せないのだということを暗示しているように思える。

また、最後の場面には次のような記述がある。

彼は始めて桜の森の満開の下に坐つてゐました。いつまでもそこに坐つてゐることができません。彼はもう帰るところがないのですから。

桜の森の満開の下の秘密は誰にも今も分りません。あるひは「孤独」といふものであつたかも知れません。

なぜなら、男はもはや孤独を怖れる必要がなかつたのです。彼自らが孤独自体でありました。

この引用部分から見えるのは、「帰るところのない」者（「孤独な者」と「帰るところのある」者（「孤独でない者」）の対比である。つまり帰るところがない「孤独な者」は桜の森の満開の下にいても「魂が散つていのちがだん／＼衰へて行くやう」な「怖れや不安」を感じないということである。帰る場所のない「孤独な者」は、自身の存在意義を失つており、魂が「分解」されていくことに抵抗もないのである。しかし、男には山（＝帰る場所）があつたはずである。それなのに本文には「彼はもう帰るところがないのですから。」と書かれている。このことは男が山ではなく女を「帰る場所」、つまり自身の拠り所として捉えていたことを暗示していると考えられる。

第二節 女の「首遊び」に表れているもの

女は山に在る間、「櫛だの笄だの簪だの紅だのを大事にし」、「まるで着物が女のいのちであるやうに」思っている。そしてこれらのものを「三日三晩とた、ないうちに女の廻りへ積みあげてみせるつもり」で男は女と共に都へ行くこ

とを決意した。つまり、彼らの都行き目的は、装飾品を手に入れることだったのだ。しかし都で暮らす中で、女は装飾品よりも人の首を欲しがるようになっていく。それではなぜ女は装飾品ではなく人の首に魅力を感じ始め、「首遊び」をするようになったのだろうか。

ここでまず問題にしたいのが女の「孤独性」である。女は男に山に連れられてきた際、ビッコの女以外の昔の女房を斬り殺すことを男に命じている。このことから、女は「人と関係を築く以前に破壊してしまう」性質を持っていることがわかる。また、男とビッコの女と山で暮らし始めてからも、女は「大変なわがま、者」で、男がどんなに尽くしても「必ず不服を言ひ」、「満足を示したことは」なかった。その上、物語を通して女の物言いは常に命令口調で高圧的である。つまり、女は対等に人と関係を築くことができない「孤独」な人物なのである。

「人と関係を築く以前に破壊してしまう」性質を持ち、人と対等に関係を築くことのできない「孤独」な女が、首という人間のシンボルを集め出し、「首遊び」に耽るようになったのは、他者との繋がりを無意識に求めた結果だったのではないだろうか。女の「首遊び」の様子を見てみると、首は「家族」を「形成」し、「首の家族へ別の首の家族が遊びに来」たりする。また、首同士が恋をしたり、男の首

が女の首を泣かせたり、姫君の首が大納言の首にだまされたりするのである。このことから、女は人間同士の基本的な関わり自体は理解していると考えられる。また、彼女は首同士の物語を「形成」するのみならず、彼女自身も首たちと関わっている。女は、「美しい娘の首」を「自分の娘か妹のやうに可愛がり」、「黒い髪の毛をすいてやり、顔にお化粧して」やっている。また、「まだうら若い水々しい稚子の美しさが残つてゐる「坊主の首」を「よろこんで机にのせ酒をふくませ頬ずりして甜めたりくすぐつたり」して可愛がつている。このことから、彼女は破壊性を秘めた人物ではあるものの、自身より年下の人間たちを慈しむ感情を持つているということが推察される。しかし、女は「五十ぐらゐの大坊主の首」に対しては人間扱いをしていない。「たれた目尻の両端を両手の指の先で押へて、クリ／＼と吊りあげて廻したり、獅子鼻の孔へ二本の棒をさしこんだり、逆さに立て、ころがしたり」と、まるで幼児が玩具で遊んでいるようである。また、彼女は最終的に「自分の娘か妹のやうに可愛がり」つていた娘の首を「針でつゝいて穴をあけ小刀で切つたり、えぐつたり、誰の首よりも汚らしい目も当てられない首にして投げだしてしまつた。このやうなところに彼女の「歪み」が見受けられる。人間扱いをして慈しみ可愛がる首もあれば、玩具のように雑に

扱う首もある。同じ人間の首であるにも関わらず、扱いが丸切り違ふのである。そして彼女は、「自分の娘か妹のやうに」思つて可愛がつていたはずの「美しい娘の首」を「破壊」してしまふ。彼女はどれだけ慈しんでも可愛がつても、そして首の家族や物語を「形成」しても結局「破壊」せずにはいられないのである。いくら彼女が「人間同士の基本的な関わり」を理解しており、社会性のある振る舞いができたとしても、人間を人間として見られなかつたり、破壊衝動に駆られて全てを滅茶苦茶にしてしまつては、実生活で他者と繋がり、関係を構築することは不可能である。

他者と関係を構築することができない「孤独」な女が他者と繋がることを無意識に求めた結果が「首遊び」だつたのだ。女は装飾品で自身の外面を飾り立てていた。しかし、いくら着飾つたところで内面の満足感を得られない。人と関係を構築することができないが人間は欲しい、その欲望は人間のシンボルでありながらも人間としては不完全な形の「首」を集め、それらの世界を形作ることで満たされた。人間ではあるが決して喋ることのない死んだ首たちは、人と関係を築くことのできない女の「孤独」を埋めてくれるものであつた。つまり「内面を飾り立てる」ために都合の良いものであつたのだ。

第三節 形成の魔術の助手

論の冒頭で述べたように、装飾品と「首遊び」はどちらも「形成と分解の魔術」を持っている。そしてこの「形成の魔術」に欠かせないのが男の存在である。

男は女の美を「形成」するために必要なものを作り出したり、水を汲みに行ったりと苦勞を惜しまない。男は「形成の魔術の助手」となっているのである。男は女の美の「形成」に欠かせない存在であるのと同様、女の「首遊び」にも欠かせない存在である。女に首をもたらすのは男であり、この男がいなければ、そもそも女は首の家族や物語を「形成」することなどできないからである。

男は「魔術の助手」であり、そしてまた彼自身も「魔術の一つの力」になることを望んでいる。しかし、それを彼が望むのは女の外側の美を「形成」することに限定される。男は女の美の「形成」に関しては積極的に「魔術の助手」となっているが、首を集めることに関しては「退屈」している。つまり男は、女の「首遊び」における「形成の魔術の助手」になることにはかなり消極的なのである。なぜ男は、女の美の「形成の魔術の助手」になることには積極的であるのに、女の「首遊び」における「形成の魔術の助手」になることに対しては消極的なのだろうか。それは、その

助手になることが彼自身の利益になるか否かによる。彼女が女の美の「形成」に積極的に関わることを望んでいるのは、女が外面を飾り立て、美しくなっていくことで男自身も満たされるからだ。一方、「首遊び」の方は男に利益が全くない。女の「首遊び」の様子からわかるように、女は「人間同士の基本的な関わり」を理解していると思われるが、男は理解できていないと思われるため、女が首を求める気持ちも理解できない。そのため男は「首遊び」の「形成」に関わったとしても何の満足感も得られず、ひたすら「退屈」なのである。

男は、人間共を「退屈なもの」だと捉えており、人間同士のコミュニケーションで最も大切な「お喋り」すらしゅうとしない。それどころか、「喋れば喋るほど退屈」だの、喋りたいことなんか無い、といった発言までしている。つまり女は、彼女の持つ破壊性故に人と関わる事ができないのであるが、男の方はそもそも社会性自体が身についておらず、「人間同士の基本的な関わり」を理解していないのである。それ故、女が首を集めることの意味も男にはわからない。

「人間同士の基本的な関わり」を理解している女は、彼女の持つ破壊性故に実生活ではその社会性を發揮することができない。彼女は死んだ首たちの物語を「形成」するこ

とによって彼女の「孤独」を埋め、その狭い世界の中で社会性を發揮することで精神的な満足感を得ている。「人間同士の基本的な関わり」を理解できず、社会性を身につけていない男には、彼女が「内面を飾り立てる」ために首を集めているということ自体、理解不能なのである。

男がいくら退屈であるとしても、「形成の魔術の助手」である男は女にとって欠かせない存在である。人間を人間と見ることができない残酷さや最終的に全てを滅茶苦茶にしてしまうという破壊性を持つ女であっても、死んだ首しかない世界では、「関係を築く」ことができるのである。自身の中にある社会性を、死んだ人間の首社会の中で存分に發揮し、首同士の関係を「形成」したり、首に愛情を注いだりと、彼女は彼女が作り出した「疑似人間社会」に浸り、抜け出せなくなっている。女は首の世界を「形成」し、その世界の中で生きるようになっていく。そしてその彼女の世界を形作る首をもたらしにくるのは男だけなのだ。そんな男を女は手放せるわけがない。本文にも、「女は男なしでは生きられなくなつてゐました。新しい首は女のいのちでした。そしてその首を女のためにもたらす者は彼の外にはなかつたからです。彼は女の一部分でした。女はそれを放すわけにいきません。」と書かれている。男が望もうが望ままいが、男は女の「形成の魔術」に組み込まれてしまつ

ているのだ。

桜の森の満開の下と女は「形成と分解の魔術」を持つという共通点があるが、その中で一つ異なる点がある。それは、桜の森は桜の森だけで「形成と分解の魔術」を作用させているのに対し、女は「分解」は一人で行うが、「形成」に関しては男という「魔術の助手」を要している点である。先ほど述べたように、男は女の「形成の魔術」に組み込まれてしまつていく。桜の森の満開は「形成と分解の魔術」をそれのみで作用させられるが、女の場合、「形成の魔術」は男との共同作業である。

破壊性を持つ彼女は彼女のみで「分解の魔術」を作用させることができるが、一人で何かを「形成」することはできない。「形成」するためには男の存在が必要不可欠であり、その点において「彼は女の一部分」なのである。

第四節 桜の森の満開の下の秘密

本文には、桜の森の満開の下の秘密は「孤独」であったかもしれない、と書かれているが、この「孤独」を持つ者として女の存在が挙げられる。前々節でも述べたように、女は彼女の持つ破壊性故に人と関係を築くことのできない「孤独」な人物であり、他者と関係を構築できない「孤独」

な女が他者と繋がることを無意識に求めた結果が「首遊び」である。

男は女を絞め殺し、女という抛り所を失ってしまったことで「孤独」となったが、女の方は元々「孤独」だったのである。第一節で述べた通り、「帰るところのない」者（＝孤独な者）は桜の森の満開の下に座っていられる（滞在できる）が、「帰るところのある」者（＝孤独でない者）は桜の森の満開の下に座ってられない（滞在できない）。つまり、帰る場所のない「孤独」な者は、自身の存在意義を失っているため、魂が「分解」されていくことに抵抗がなく、「怖れや不安」を感じないのである。女を負ぶって桜の森の満開の下に入った男には「分解」の作用が二重に働いて男はパニックになった。この時点ではまだ女は生きており、男には「帰る場所」（抛り所）があったのだから当然である。一方、女の方は桜の森の満開の下でパニックになったという描写がない。なぜなら女はそもそも「孤独」であるため桜の森の満開の下に滞在できるからである。そして作品は、男と女が消えてしまうシーンで締め括られる。この部分に関しては第一章の最後の節でも触れている。そこで論者は、女の姿が「掻き消えてた、幾つかの花びらになつ」たのは男の幻視で、彼の身体が消え、「あとに花びらと、冷めたい虚空がはりつめてゐる」というのは、

彼が心を失い、狂い死にしまったことを示しているのだらう、と述べたが、ここまでの論を踏まえると、これにはもう一つ別の捉え方があるように思える。男と女の身体が消え、桜の花びらになったと書かれているのは、彼らが「桜の森の満開の下の秘密」を持ってしまったから、つまり彼らが「孤独」であったために桜の森の満開と一体化し、花びらになったのではないかと考える。

「桜の森の満開の下の秘密」は「孤独」である。自身の存在意義を持たない「孤独」な者たちは桜の森の満開の下に入っても、魂を「分解」される恐ろしさを感じずにその場に滞在することができる。元々「孤独」であった女の死体と、女を失ったことにより「孤独」となった男は桜の森の満開の下と共鳴し合い、花びらとなり、桜の森の満開の一部となってしまったのではないだろうか。

第三章

第一節 桜の森のモデルについて

本作品の六年後に発表された安吾のエッセイ「明日は天気になれ」の「桜の花ざかり」（一九五三年四月五日発行

の『西日本新聞』第二五〇三八号（夕刊）の第一面に発表）には、戦争の真つ最中にも咲いていた桜の花のことが書かれていた。

戦争の真ツ最中にも桜の花が咲いていた。当り前の話であるが、私はとても異様な気がしたことが忘れられないのである。

私の住んでるあたりではちようど桜の咲いてるときに空襲があつて、一晩で焼け野原になつたあと、三十軒ばかり焼け残つたところに桜の木が二本、咲いた花をつけたままやつぱり焼け残つていたのが異様であつた。

すぐ近所の防空壕で人が死んでるのを掘りだして、その木の下へ並べ、太陽がピカピカ照つていた。我々も当時は死人などには馴れきつてしまつて、なんの感傷も起らない。死人の方にはなんの感傷も起らぬけれども、桜の花の方に變に氣持がひつかかつて仕様がなかつた。

焼死者を見ても焼鳥を見ると全く同じだけの無關心しか起らない状態で、それは我々が焼死者を見なれた

せいによるのではなくて、自分だつて一時間後にこうなるかも知れない。自分の代りに誰かがこうなっているだけで、自分もいずればこんなものだという不逞な悟りから来ていたようである。別に悟るために苦心して悟つたわけではなく、現実がおのずから押しつけた不逞な悟りであつた。どうにも逃げられない悟りである。そういう悟りの頭上に桜の花が咲いてれば変テコなものである。

空襲によつて焼け野原になり、焼死体がそこら中に転がっているという「死」と絶望の空気に包まれた町中で、桜の花が「生」のオーラを放ちながら咲き誇っているのは、ちぐはぐで、異様な光景であつたことは明らかだろう。また、一時間後には自分も焼死体となつてそこら辺に転がっているかもしれないという、常に自分の「死」を意識している状況の中、頭上では美しく桜が咲いているという、「死」と「生」が混在した中であつては、変な氣持ちになるのは当然のことである。この「異様」さや、「變に氣持がひつかか」る、「変テコ」というのは、「桜の森の満開の下」で、満開の桜の森の下を通る時の「氣が變になる」という感覺や、この物語全体に漂う異様な雰囲気と重なるように思う。そして、「焼死者を見ても焼鳥を見ると全く同じだけの

無関心しか起らない」ということ、「自分もいずれはこんなものだ」という「逃げられない悟り」を開いているということから、精神的に疲弊し、正気の沙汰ではないことが窺える。つまり、桜の森の満開の下を通るときの、「花びらがぼそく散るやうに魂が散つていのちがだんく衰へて行くやう」な感覚、つまり「魂が分解されていくような感覚」に陥っていたのではないだろうか。

また、「桜の花ざかり」の中には、「ある謡曲^{vi}に子を失つて発狂した母が子をたずねて旅にでて、満開の桜の下でわが子の幻を見て狂い死する物語があるが、まさに花見の人の姿のない桜の花ざかりの下というものは、その物語にふさわしい狂的な冷たさがみなぎっているような感にうたれた。」という部分があるが、「桜の森の満開の下」でも、「能にも、さる母親が愛児を人さらひにさらはれて子供を探して発狂して桜の花の満開の林の下へ来かかり見渡す花びらの陰に子供の幻を描いて狂ひ死して花びらに埋まつてしまふ（このところ小生の蛇足）といふ話もあり」と同じ話を持ち出している。ここから、空襲の後に見た桜も、「桜の森の満開の下」の桜の森も、安吾にとって「狂的な冷たさ」を持つものだと言える。「桜の花ざかり」の中には「花見の人の一人もない満開の桜の森というものは、情緒などはどこにもなく、およそ人間の氣と絶縁した冷たさがみな

ぎつていて、ふと氣がつくと、にわかには逃げだしたくなるような静寂がはりつめていたのであった。」とも書かれており、これは「桜の森の満開の下」に書かれる、そこを通るときに人々が感じるものと同じである。

このようなことから、「桜の森の満開の下」の桜の森は、安吾が空襲の後に見た桜をモデルとしているのではないかと考えられる。

第二節 「孤独」について

戦争は人間の生活、精神、肉体すべてを「破壊」するものである。肉体においては最早人間であったことが窺えぬような「破壊」である。前節で述べたように、安吾は当時の自分を「焼死者と焼鳥とに区別をつけがたいほど無関心な悟りにおちこんでいた」と表現しているが、これはそのような精神状態になる程そこかしこに死体が大量に転がっていたということであり、このような状況下では、火葬が追い付かなかつたであろうことも想像に難くない。浅子逸男の『桜の森の満開の下』について（『花園大学文学部研究紀要』第五三号 二〇二一年三月）には次のような記述がある。

「桜の花ざかり」で安吾が見た場所には三月の空襲で亡くなった人々の遺体が放置されたままだったのだらうか。

まもなくその上野の山にやっぱり桜の花がさいて、しかしそこには緋のモーセンも茶店もなければ、人通りもありやしない。ただもう桜の花ざかりを野ッ原と同じように風がヒョウヒョウと吹いていただけである。そして花ビラが散っていた。

と安吾は記しているが、花の下は死体が集められていた場所であった。もしそのままだったとすれば、死体の上には花びらを舞い散らしていたのである。三月に息を引き取った死者が火葬もされず埋葬されなかつたとすれば、どのような状態になるであらうか。「桜の森の満開の下」で描かれる首遊びの場面で、首の鼻が欠けた姿になるのは、上野の山の死体が桜の季節になる一ヶ月間で変容していく様なのではないか。「桜の森の満開の下」に「姫君の首も大納言の首ももはや毛がぬけ肉がくさりウジ虫がわき骨がのぞけてゐました。二人の首は酒もりをして恋にたわぶれ、齒の骨と噛み合つてカチ／＼鳴り、くさつた肉がペチャ／＼／＼くつき合ひ鼻もつぶれ目の玉もくりぬけてゐました」と描かれるほど、桜の下の死体は腐敗していたはずで

ある。安吾は、「桜の花ざかり」で触れた上野の桜と、その下に積み重ねられた死体を「桜の森の満開の下」のなかで用いたのである。焼鳥とかわらない死体から肉がくさつてウジもわいた死体は、いわば屍体変相図の様相である。

「首遊び」の場面で描かれた生々しい「人の首の腐敗の様子」は、やはりそれを目にした経験があるからこそその筆致であらう。火葬の追い付かなかつた大量の死体は肉が腐りウジが湧いて「分解」されていく。人間として生きてきたその肉体は、一個人の尊厳など最初からなかつたかのやうに無残に無慈悲に「破壊」されていくのである。他者と関係を構築し、帰る場所があつたはずの人間たちは、空襲により命を失つた瞬間「孤独」となり、抵抗することのない肉体は満開の桜の木の下で無残に静かに「分解」されていったのである。

「桜の花ざかり」の中で安吾は次のように述べている。

我々は桜の森に花がさけば、いつも賑やかな花見の風景を考えなれている。そのときの桜の花は陽気千万で、夜桜などと電燈で照して人が集れば、これはまたなまめかしいものである。

けれども花見の人の一人もない満開の桜の森というものは、情緒などどこにもなく、およそ人間の氣と絶縁した冷たさがみなぎっていて、ふと氣がつくと、にわかには逃げだしたくなるような静寂がはりつめていたのであった。

血の通った生きた人間がいるときの桜の森の満開の下は「陽気千万」で「なまめかしい」。一方、血の通った人間のない桜の森の満開の下は「およそ人間の氣と絶縁した冷たさがみなぎって」おり、「ふと氣がつくと、にわかには逃げだしたくなるような静寂がはりつめている」のである。安吾はその恐ろしい静寂から逃げ出したくなっているが、自身と同じ人間であったはずの死体はその静寂から逃げ出すこともなく、桜の森の満開の下に身を横たえ、抵抗することなく「分解」されていく。「花見の人の姿のない桜の花ざかりの下」には「狂的な冷たさがみなぎって」おり、安吾はそこから逃げ出したいと思う自分と、逃げ出すことなく「分解」されゆく「元は人間であった物体」を対比したのではないだろうか。「生きている人間」である自分と「死んだ人間」である死体の違いとは何か。それは「帰る場所」があるか否かではないだろうか。他者との繋がりのある安吾には「帰る場所」がある。しかし、死んだ者たちには「帰

る場所」などない。死んだ者たちは自分自身を失い、そして他者との繋がりも失い、「永遠の孤独者」となるのである。自分自身も他者も失った「孤独な死者たち」は、「狂的な冷たさ」がみなぎっている桜の森の満開の下から逃げ出すことなく静かに無残に朽ち果てていく。安吾自身は逃げ出したいのには死者たちは逃げ出すことも抵抗することもなく「分解」されていく。桜の花の下で同じ人間であったはずの者たちが生前の形を失い、自分自身も存在意義も失って朽ち果てていく様子は、強烈な死の「孤独」を感じさせるものであったに違いない。安吾が「桜の森の満開の下の秘密」として挙げた「孤独」、そして本作品で描かれた、「孤独な者たち」が「分解の魔術」に抵抗することなく桜の森の下に居続けられる様子は、安吾のこの経験によるものではないだろうか。

第三節 戦争と「桜の森の満開の下」

「桜の森の満開の下」の前年に発表された「墮落論」（一九四六年四月一日発行の『新潮』第四三卷第四号で発表）に、戦時下の自身について次のような記述がある。

私は血を見ることが非常に嫌ひで、いつか私の眼前

で自動車が衝突したとき、私はクルリと振向いて逃げだしてゐた。けれども私は偉大な破壊が好きであつた。けれども私は偉大な破壊を愛してゐた。運命に従順な人間の姿は奇妙に美しいものである。

私は戦きながら、然し、惚れぐゝとその美しさに見とれてゐたのだ。私は考へる必要がなかつた。そこには美しいものがあるばかりで、人間がなかつたからだ。――中略――戦争中の日本は嘘のやうな理想郷で、たゞ虚しい美しさが咲きあふれてゐた。――中略――たとへ爆弾の絶えざる恐怖があるにしても、考へることがない限り、人は常に気楽であり、たゞ惚れぐゝと見とれてゐれば良かつたのだ。私は一人の馬鹿であつた。最も無邪気に戦争と遊び戯れてゐた。

やはり戦争に言及した「焼夷弾のふりしきる頃」(生前未発表 一九四六年頃に執筆)、そして「わが戦争に対処せる工夫の数々」(一九四七年四月二〇日発行の『文学季刊』第三輯の「創作特輯」欄で発表)のそれぞれで、安吾は次のように述べている。

兄から新潟へ疎開しては、という話があつたが辞退したのは、東京の最後の日、つまり日本の最後の日を見とけようという考えであつた。東京と一緒に死んでも仕方がないと考えていた。露の命というものにさほど執着はなかつたから、劇しいものの好きな私は降りしきるバクダンが怖しくもあつたが、何も無い平凡よりはマシだと思つていた。(「焼夷弾のふりしきる頃」)

私は友人縁者から疎開をすゝめられ、家を提供するといふ親切な人も二三あつたが、それを断つて危険の多い東京の、おまけに工場地帯にがんばつてゐた。私は戦争を「見物」したかつたのだ。死んで馬鹿者と云はれても良かつたので、それは私の最後のゼイタクで、いのちの危険を代償に世紀の壮観を見物させて貰ふつもりだつた。言ふまでもなく、決して死に就て悟りをひらいてゐるわけではない私が、否、人一倍死を怖れてゐる私が、それを押しても東京にふみとどまり、戦禍の中心に最後まで逃げのこり、敵が上陸して包囲され、重砲でドカ／＼やられ、飛行機にピュー／＼機銃をばらまかれて、最後に白旗があがるまで息を殺してどこかにひそんでゐてやらうといふのは、大いに矛盾

してゐる。——中略——私は命令されることが何より嫌ひだ。そして命令されない限り、最も大きな生命の危険に自ら身を横へてみることの好奇心にはひどく魅力を感じてゐた。私は好奇心でいっぱいだった。そこで又、私は特殊な訓練を始めなければならなくなつた。言ふまでもなく、これも亦、最大の危険の下で、如何にして、なるべく死な、いやうにするか、といふことだ。(「わが戦争に対処せる工夫の数々」)

以上の引用から、安吾が戦争の持つ暴力的な破壊性に惹かれていたことがわかる。安吾はこの「偉大な破壊」を愛し、見惚れていた。爆弾を恐ろしく思いながらも、また人一倍死を怖れながらも「危険の多い東京の、おまけに工場地帯」に踏みとどまるくらいには、安吾は戦争の「偉大な破壊」に惹かれていたのである。

「桜の森の満開の下」では、このような破壊性を持つ者として女が描かれている。女は「首遊び」で人間の肉体を「分解」した。そして、男の魂を引き込み「分解」しつゝあつた。更に、彼女はピッコの女以外の昔の女房たちを殺すことを男に命じたりと、関係を築く前に他者を「破壊」している。つまり、戦争と女には人間の肉体も精神も、そして他者との関係も全て「破壊」し尽くすという共通性がある

のである。

安吾は戦争の持つ暴力的な破壊性に惹かれていた。その「破壊」を見るためにわざわざ「特殊な訓練」をするほど、安吾はその破壊性に魅力を感じていたのである。それ程までに惹かれていたということは、「安吾の魂は戦争の破壊に引き寄せられている」と言えないだろうか。まるで女に引き込まれ、魂を「分解」されつゝあつた男のように。このことから、「桜の森の満開の下」の男と女は、安吾と戦争を投影したものではないかと考える。

また、「青春論」(前半は一九四二年一月一日発行の『文学界』第九卷第一一号で発表され、後半は翌二月一日発行の『文学界』第九卷第一二号で発表)の中には次のような記述がある。

このやうな微妙な心、秘密な匂ひをひとつく意識しながら生活してゐる女の人にとつては、一時間一時間が抱きしめたいやうに大切であらうと僕は思ふ。自分の身体のどんな小さなもの、一本の髪の毛でも眉毛でも、僕等に分らぬ「いのち」が女の人には感じられるのではあるまいか。

このやうな女の人に比べると、僕の毎日の生活など

はまるで中味がカラッポだと言つていゝほど一時間時間が実感に乏しく、且、だらしが無い。てんでのいちが籠つてをらぬ。一本の髪の毛は愚かなこと、一本の指一本の腕がなくなつても、その不便に就ての実感や、外見を怖れる見栄に就ての実感などはあるにしても、失はれた「小さいのち」といふものに何の感覚も持たぬであらう。

これについて、浅子前掲論の中では次のように述べられている。

櫛、簪、簪、紅といった美の断片を集め、組み合わせることで美を結晶させる。だが、男はそれを理解できない。ただその不思議を見ているだけである。「一時間一時間が実感に乏し」とは、生きていくうえでこの区切りがなく、断片断片のつながりを自覚しないということである。「失はれた「小さいのち」といふものは髪であつたり、指であるかもしれないが、過ぎゆく一時間一時間であり、また女が大切にする美の断片でもある。ひとつひとつに命があり、そのような命の断片を意識することができなのが女性だといふのである。それに対して安吾はそのような感覚は理解でき

なかった。山賊が美の断片を理解できず、「こんなものがなあ」と言うしかなかったように。

「個としては意味をもたない不完全かつ不可解な断片が集まることによつて一つの物を完成」し、「その物を分解すれば無意味なる断片に帰する」という女の美の「形成」と「分解」を見ることによつて男は、「今迄は意味も値打もみとめることのできなかつたもの」であつた装飾品に、「魔力」を感じるようになる。作中には、「魔力は物のいのちでした。物の中にもいのちがあります。」と、「魔力＝物のいのち」であることが書かれており、これは男には理解できなかつた「物のいのち」を、彼が「魔力」として理解したという意味で書かれていると考えられる。

この男が、美の断片を「いのち」として理解できないのと同様、浅子氏が指摘しているように、安吾も理解ができなかつたと言える。このことから、安吾は、この男に自身を重ねているのではないかと考えた。安吾が自分を重ねていたと思われるこの男は、破壊性を持つ女に心を支配され、女に魂を「分解」されていく。それと同様、戦時下の安吾は戦争の「破壊」に魅了され、心を奪われていたのである。本作品の桜の森は、安吾が見た戦時下の桜の木がモデルになっていることは第三章第一節で述べた通りであ

る。また、「桜の森の満開の下の秘密」である「孤独」に
関しては、モデルとなった桜の下で「以前は人間であった
者たち」が死によって「永遠の孤独者」となり、抵抗なく
「分解」されていく様子を見て思いついたものではないか、
ということも論じてきた。そして安吾は戦争の持つ「偉大
な破壊」に魅了され、心を奪われていた。「墮落論」、「焼
夷弾のふりしきる頃」、そして「わが戦争に対処せる工夫
の数々」の引用からも、彼が激しく戦争の「破壊」に惹か
れていたことがわかる。これまでに述べた通り、その惹か
れようは、本作品で男が女に心を奪われる様子と重なるの
である。戦争と女は激しい破壊性を持っており、「青春論」
の引用部からは安吾が男と同じような性質を持った人物で
あるということもわかる。安吾は本作品において、自身を
男、戦争の「破壊」を女に当てはめ、魂が「分解」される
が如く戦争の「破壊」に魅了されていた自身の姿を描き出
したのではないだろうか。

i 河内重雄「坂口安吾『桜の森の満開の下』…理性の限界に開
する文脈」(『語文研究』 一一二五巻 二〇一八年六月九日 九
州大学国語国文学会)

- 土屋忍「坂口安吾『櫻の森の満開の下』を読む——愛と美と
殺戮と——」(『日本文学』 六四巻 二二号 二〇一五年一二月
一〇日 日本文学協会)
- 織田淳子「坂口安吾『桜の森の満開の下』研究——花の下に
見る時空間——」(『富大比較文学』 五巻 二〇一二年一二月
一二日 富山大学比較文学会)
- 原卓史「坂口安吾『桜の森の満開の下』の〈終わり〉」(『国
文学 解釈と鑑賞』 至文堂 七五巻九号 二〇一〇年九月)
- 加藤達彦「『桜の森の満開の下』—ウツ・ロ・ヒのテキスト」
(『国文学 解釈と鑑賞』 至文堂 七一巻一一号 二〇〇六年
一月)
- ii 応傑「『美しい女』と『満開の桜の森』の真相——『桜の森
の満開の下』をめぐって」(『朝日大学経営論集』 二二巻
二〇〇六年九月三〇日 朝日大学経営学会)
- iii 河内 注 i 前掲論、織田 注 i 前掲論、原 注 i 前掲論、加
藤 注 i 前掲論
- iv 土屋 注 i 前掲論、応 注 i 前掲論
水本次美「坂口安吾『桜の森の満開の下』論—男の〈欲望〉」
(『文学論藻』 東洋大学文学部日本文学文化学科編 七八号
二〇〇四年二月 東洋大学文学部日本文学文化学科研究室)
- v 河内 注 i 前掲論、原 注 i 前掲論、応 注 i 前掲論
- vi 謡曲「桜川」を踏まえている。